逃げ出したい話:仮題

永瀬　銘心

「私の家で飼っている犬がいるでしょう。」

「ああ。」

サツキという名前のミニチュアダックスがいる。湊の家に遊びに行ったら必ず遊ぶ。かわいい犬だ。

「もう十四年生きてて、寿命なのかな。とにかく最近元気がないんだ。」

「そうなんだ。」

決して興味がないわけじゃない。ただあまりにも悲しそうに言うものだからかける言葉がわからなかったのだ。僕は犬を飼ったことがないし、悲しいなんて無責任に言ってもあまりにもお粗末だと思ったから僕はそれ以上何も言わなかっただけだ。

「もうずっと一緒にいるのに、それなのに私がこうして学校にいる間に死んじゃったらあまりにも悲しいよ。もしそんなことがあったら神はいないと思うな。」

でもやっぱり神はいなくて都合よく看取ってあげることはできなかった。死ぬ時間と場所は選べないから。

次の日の夜、サツキに会おうと思い湊を訪ねた。インターホンを押すと玄関の扉を湊が開けてくれた。その湊は、それはひどいものだった。目を真っ赤に泣きはらし、道を行く年端もいかない子でも大丈夫かと声をかけてもおかしくないありさまだった。サツキが亡くなったのだとその顔が教えてくれた。遺体が傷まないように安置しているらしく、僕は直接手を合わせることはできなかった。僕も悲しいといえば悲しかったが、それは湊が悲しそうにしているから悲しいだけなのかもしれない。とにかく僕にとっては泣くほどのことでもなかった。

「学校に行っている間に息を引き取ったの。」

沈黙が痛い、逃げ出したい。

「十分同じ時を過ごしたし、このごろはずっと一緒にいたから後悔はないよ。だけどお別れぐらい言いたかったよ。」

なんでそんなに悲しそうなんだよ。もっといつもみたいに堂々としていてくれ。こんな湊は見たくなかった。僕は泣く気分ではなかったが悲しそうに俯く湊をみていられなかった。最後にお別れを言わせてあげたくなってしまった。

十分にサツキとの思い出をイメージする。湊にじゃれつく元気なその姿を鮮明にイメージする。すると目の前に死んでしまったはずのサツキが現れた。

「正しいさよならをしようか。何も言えないでいなくなるのは悲しいから、本当に最後の時を過ごそう。」

「どうして……。」

当の湊は失った愛犬の姿を目の前に呆然としている。

「僕は魔法使いなんだ。」

この魔法は使いどころもないし、ただ悲しいだけの欺瞞にすぎないけど湊のためなら使ってもいいと思えた。

「三十分だけ、三十分だけ時間を作る。この時間をどうか後悔のないようにつかってさよならをしてほしい。」

僕に何か言いたげな表情だったが愛犬と向き合い抱きしめる。僕も一時的に表れたサツキの姿をみて少し撫でた後、その家を出た。外は暗いが夜が更けているわけではない。でもゲームセンターや本屋にいって娯楽を貪るきにもならなかった。そう思い近くの公園に向かいながら考える。

この魔法は救いになるのか、それとも絶望になるのか。この魔法を使えるようになってからそればかり考えている気がする。ぼんやり考えていると約束の三十分は過ぎようとしていた。湊の家に戻り話をする。

「満足のいくさよならはできた。」僕は訪ねる。

「できた、ありがとう。」

まるでつきものが落ちたようなすっきりとした顔をしている。さっきまでが嘘のようだ。

「でも、義弘。どういうこと。」

ありえないよ、夢じゃないよねと続けて言う。

「さっきもいったけど、僕は魔法使いなんだ。死んだ者の心をもう一度だけこの世界に戻すことができるんだ。」

「魔法……。」

信じられないようだ。それはそうだ、魔法と言われすぐに納得できるほうがどうかしている。

「戻ってきてほしい命のなくなったものを思いながら願うと現れるんだ。」

「……なんで三十分だけだったの。」

どう答えようか悩んだ。強く願えば願うほど効果は長くなる。でも僕はサツキとも長いこと遊んでいた。だから三十分だけでなくもっと長い時間戻してもよかった。だけどそうしなかった理由がある。

「死んでしまったものとは二度と会えない決まりがふつうはある。それを無視する魔法だから死を軽んじてしまうことになるだろうし、それに甘えてしまうことになるかもしれない。だから三十分だけにした。それだけだよ。」嘘ではない。

「そっか、ありがとう。とても良い別れができたよ。」

ひどくすっきりとした顔で湊は答えた。家に帰り親に顛末を説明する、当然魔法のことは話さない。

その次の日だった。

「人助けをしよう。」

帰宅途中、湊はさも名案を思い付いたかのように言い放った。湊の提案で誰かが幸せになったことは、あるかもしれないがいつも何かしらのトラブルにつながるイメージしかない。僕は恐るおそる尋ねた。

「それ、本気。」

絶対にろくなことにならない。そんな予感はあった。

「本気ほんき、後悔をしたまま生き続ける人を救うんだよ。」

この前の話を本当に聞いていたのか。頭を抱えた。

「ちょっと寄り道しようか。」

家と学校とを結ぶ途中にある湖に立ち寄る。残暑が残る中でも涼しさを残すここはお気に入りの場所だった。そして湊とここでくだらない話に花を咲かせることが気に入っていた。

展望台のベンチに座り何から話そうか考える。

「正直に言うと、僕はこの魔法が好きではない。」

「なぜ嫌いなの。死人と会えるんだよ。」

「別に嫌いなわけじゃないよ。ただ少し苦手なんだよ。」

思い付くままに必死に言葉を紡ぐ。半分ヤケだ。

「この魔法は生き物のルールを破る魔法なんだ。僕が思うにすべてのものは一期一会なんだよ。明日生きている保証はないから後悔しないように生きるべきなんだよ。明日、ふとしたことで大切な人とさよならを、望もうが、望まざろうがしなくちゃいけないかもしれない。だから人はよく生きることができると思うんだ。だけど僕の魔法は人間の美しさを奪いかねない、そんな魔法だ。」

湊はただ静かに聞いていた。基本的に物分かりはいいんだ、だけど時々一人で突っ走ることがある。それがなければまともな女の子なのだけど。

「言いたいことはわかった。」

ならおとなしく引き下がってくれ。だけどそんな願いは届かない。

「だとしても私は人助けになると思う。」

ほら始まった。

「一期一会なのは理解できるし、美しさを奪うかもしれないという話も、多少は納得できる。だけど私たちは人間だよ。間違いだって犯す。その間違いのせいで、納得のいかないさよならをしてしまうかもしれない。そしてずっと消えない後悔を背負って歩けなくなる人だっているはずだよ。でもその後悔を払しょくして、また前を向いて歩けるようになるなら、その魔法は人を美しくするものだと思うよ。」見ているところが違うだけだよと付け加える。

ふざけんな、こんなの水掛け論だ。僕の主張も湊の主張も、それぞれ理解できる主張だろ。

「じゃあ仮に、かりにこの魔法を人助けに活かすとしてどういかすの。」

ああ、だめだ。のまれてしまっている。

「《再会屋》を開こう。納得いかないさよならをしてしまい、どうしてもどうしても前に進めなくなった人の後悔を消す仕事をするの。」

ほらそうやって、話を聞かない。だけど、一時の気の迷いだった。僕たちは《再会屋》を開くことになってしまった。

最初に僕たちが話し合ったのはどうやって後悔している人を集めるのかだ。魔法なんてものを信じる人は当然いなくて、だから普通の商売のようにはいかない。だからインターネットで裏サイトというとちょっと古いけど、とにかくインターネットで依頼用のウェブサイトを作ることにした。

『ひどいさよならをして後悔している方へ。納得できないさよならを納得できるものにしませんか。私たちは《再会屋》といって亡くなった人ともう一度話す機会を設けることができます。ご依頼は以下のメールアドレスまで。』という説明書きとフリーで取得できるメールアドレスを添えたサイトを無料のクラウドサーバーに設立した。

「本当にこんなので依頼が来るとは思えない。」僕は疑問を口にする。

「でもやってみないとわからないよ。」

その日の夜だった。一件のメールが届いた。

『先月亡くなった祖母の件でメールを送りました。あなた方が何者かがわからないので名を名乗ることはできませんが、信用してもよいのでしょうか。』

本当にメールが来るとは思いもよらなかった。そんなに乗り気ではなかったから嬉しくはないが感心はした。後悔のために、怪しげなウェブサイトを見つけてメールを送るものなのか。なんにせよ初仕事なので慎重にこなす必要がある。

『ご連絡ありがとうございます。条件を満たすのであれば再会を果たすことができます。』と書き送信ボタンを押し眠りにつこうとするつかのま思案する。

別に条件なんてたいしたことはない。なぜ会いたいのか、その人はどのような人物なのか、アルバムを見せてくれませんかなどの簡単なものだ。こんな偽善なんてやりたいわけじゃない。

「昨日の夜依頼のメールが来たよ。」

朝、教室に座っている湊に声をかける。

「思ったより早かったね。どうだった。」

「まだ何もないよ。本当に《再会》させてくれるんですか、みたいな内容だった。」

「メール見せて。」

「転送設定は済んでるから君のスマホで見ればいいよ。」

「いいじゃん、減るもんじゃないし。」

制服の袖をくいっと引っ張られて強制的に隣に座らされる。メールを見せると本当にこれだけなの、と尋ねてきた。これだけだよ、本当に。

「いや、新しいメールが来てた。」

『あって話がしたいのですけど可能ですか。』

「依頼してくれた人が直接会いたがってるんだけど、どうする。」

「私は構わないよ、今週の土日は空いてる。できれば早いほうがいいよね。よし土曜日に会おう。」

僕は相手の意思次第で所と文句を言ったけど聞く耳を持たず善は急げと続けた。

僕は夜にかけて何通かやりとりをして、次の土曜日に駅前の喫茶店で会うことになった。

土曜日、待ち合わせ場所の喫茶店に二人で入る。一人遅れてくる旨を説明する。席は空いているところなら自由に座っていいらしく、湊の強い希望で窓際の席を確保する。待ち合わせの時刻にはあと一〇分ほど時間があるので手持ち無沙汰といったところだ。

「どんな人かな。あまり危ない人ではないといいけど。」

湊はこういうとこで心配性なきらいがある。

「メールは丁寧だったよ。」

「メールなんていくらでも取り繕えるでしょ。」

それはそうだ。その時喫茶店のドアベルが鳴る。気の弱そうな青年が顔を見せた。僕たちのほうを向いてすこし困ったような顔で尋ねる。

「あの、すいません。《再会屋》の方でしょうか。」

「お待ちしてました。とりあえず、座って話しませんか。」

「あ、ありがとうございます。」

青年を席に座らせてコーヒーを一口飲む。コーヒーにこだわりがあるわけではないがおいしいか、不味いかぐらいはわかる。これはそこそこおいしいコーヒーだ。

「えと、思ったより若いんですね。」青年が口を開く。

「はい、僕もこの女の子も高校生です。あまり素性を知られたくないので、本題に入りませんか。」

僕としてはもっと雑談に興じたかったが、僕たちが何者なのか知られるのは不味いと思った。湊もそこは同意らしく、何も言わなかった。口寂しくなってコーヒーをもう一口飲む。

「では、あなたの名前と会いたい人の名前を教えてください。」

「名前を言わなくちゃいけないんですか。」あなたたちは名乗らないのに不公平だ、とでも言いたそうだ。僕は苦笑しながら言う。

「許してください。あまり知られたくないんです。それではまず、あなたが《再会》となぜ会いたいのか教えてくれませんか。」

「わかりました。俺が会いたいのはおばあちゃんです。大事に、大切にされてきましたが俺はその気持ちに報いることができなかったんです。」青年はそう言って後悔を語り始めた。

彼のおばあちゃんは癌だった。先が長くないことは知っていたが、一緒に過ごす時間をあまりとらなかった。彼の誕生日におばあちゃんから電話がかかってきた。去年の十一月のこと。もう長くないからこれが最後かもねと言われたのに、気の利いたことを何も言ってあげられなかった。一月に控えた成人式の写真を送ろうかと、そう言いたかったが受け取ることができそうもないことは知っていたため何も言えなかった。そのままなんだか気まずくなってしまってその電話が最後の会話になってしまったという。

「亡くなる前にもう一度電話をかけて今までありがとうと伝えたかったんだ。この後悔がずっと心にある。だからどうか、本当に《再会》させてくれるなら、どうか助けてほしい。」

彼の気持ちが痛いほど伝わってくる。わかってはいたが、協力するということは人の痛みに触れることだ。これは想像以上につらい。

それから僕たちは彼のおばあちゃんがどのような人かを教えてもらい、後日また改めて会うことになった。

「どう、できそう。」青年と別れた直後、湊が軽々しく聞く。きっと重い空気を拭おうとしての配慮だろう。空気をよめない人間ではないのだ。

「人の後悔を聞くのは楽しいものじゃないよ。」苦々しく応える。

「私もつらかった。でも後悔の重みってのをすこし実感したかも。」

僕は黙る。人の痛みなんてのはそんな簡単に理解できるものじゃないだろ、と喉元まで出かかる。さすがにひねくれてすぎだな。そんな話を聞きながら家路につく。

後日彼の家に呼んでもらい、彼のおばあちゃんについて詳しく聞いた。居間で話を聞きながら依頼を引き受けるか考える。

「だいたいわかりました。その依頼引き受けます。」

「本当か、ありがとう。」青年は笑みを浮かべながらそう言った。

僕はまぶたを閉じて集中する。彼のおばあちゃんの話を思い出しながら細部までイメージを膨らませる。そのとき玄関の扉が開いた。青年が玄関を見に行き、小さな声をあげる。

「おばあちゃん……。」今にも消えてしまいそうな声だ。

「俺さ、ずっと謝りたかったんだよ。大切に、大事にしてもらったのに最後は本当にどうしようもない終わり方でさ。だからずっと申し訳なく思ってたんだ。ごめん本当に。」

悲痛な声が響く。ほらみろ、誰がこんなところに好んで立ち寄らなくちゃいけないんだ。あまりにも悲しくてどうしようもないじゃないか。

「そんなのはね、気にしていないよ。人はいずれ死ぬ。その人とのさよならが悪くて後悔をしてしまうかもしれない。だけどその後悔を糧とできるなら、それは年寄りが若い者に送ることのできる最後の教育というものさ。」おばあちゃんはそう言って、彼を抱きしめた。泣いているのか肩をふるわせている。いたたまれなくなって居間に戻り湊の隣に座る。

しばらくして青年が居間に戻ってきた。

「ありがとう。」青年が言った。

「お役に立ててよかったです。僕たちはこれで帰ります。」

「何か払わなくていいのか。お金はたくさんあるわけじゃないけど、高校生が楽しめるぐらいの額は払えるぞ。」そう言って財布を取り出す。

「いえ、ビジネスではないので。」そういって少ない荷物をまとめて靴を履く。

「本当になにもいらないのか。」重ねて聞かれる。

「僕たちまだお昼ご飯を食べてないんです。よければその分のお金をください。」

面倒になって要求した、これぐらいなら許容範囲だろう。お金を受け取って何を食べようか考えながら玄関を出る。

「本当に、ありがとう。」青年の声が聞こえた。やめてくれ、そんなことを言われる善行をした気になってしまう。

「感謝されてるのになんでそんなに苦しそうなの。」

後悔を糧にして進めるならそれでいいじゃないか、あの人は本当に前に進めなかったのか。わからなくて、ぐるぐると同じことばかりを考えてしまう。近くの飲食店でそばを食べたが味がしなかった。

家に帰ると母さんがいた。

「どこに行ってたの。湊ちゃんと遊んでたの。」母さんが尋ねる。

「湊とご飯たべて帰ってきた。」

「最近よく遊んでるみたいね。たまには家に連れてくればいいのに。まだ小さい頃はそこの柱に身長を刻んだりしたじゃない。」

これはかなり長い話になるぞ、覚悟を決めた。

次の日の帰り、いつもの湖で湊と歩いていた。《再会屋》を続けるべきなのかどうかを話したかった。

「いつ失敗するかわからない、こんな綱渡りみたいなこと本当ならよくないよ。」

「でも喜んでたでしょ、あの人。」

喜ばない人なんていないだろ、と心の中で舌打ちをする。

「前も言ったでしょ、進めなくなった人を助けるの。」

「でも彼はまだ歩けたかもしれない。」

「早いか遅いかの違いでしょ。」善は急げ、彼女のポリシーだ。善かどうかなんてわからないのに。

湖を背に向けて本格的に帰ろうとする。湖に至る道の手前には急な坂道がある。しかも谷側を正面に右曲がりのカーブをしているから危ないなと思う。その坂から車が結構な速度をだして下ってきた。もっとスピードを落とせよと毒づく。いや、さすがにスピードを出し過ぎじゃないか。いやな予感はあたる、誰かが言っていた。速度をおとすことのできなかった車がカーブを曲がりきれずに突っ込んできた。とっさに顔を防いだ。だけどいつまでたっても衝撃はこない。それは数秒も経っていない時間だがきわめて長い時間に感じられた。背後で音がする。振り向くと湊が——。

CTスキャンの結果も異常はなく何針か塗っただけで命に別状はないとお医者さんは言っていた。医者は車にはねられてこの程度の怪我ですんでいるのは奇跡だと。明日かあさってには退院できるそうだ

次の日湊のもとを訪ねると元気そうだった。頭を強く打っているから今日は入院だけど明日に退院できると報告してきた。

「お大事に。」僕は早々に帰り支度をする。じゃあ、と声をかける直前湊が言った。

「新しい依頼が来てるよ。」

「退院したらね。」

家に帰ってお風呂に入ろうと服を脱いだとき、左腕の鋭い痛みに声が漏れる。二の腕の切り傷が開いたらしい。止血をして、今日はシャワーだけにしようかと考える。

シャワーを浴びて、ふと柱の傷に目がゆく。湊と僕の身長を刻んだ実体の記憶だ。今は忌々しさが心を支配する。

退院した次の日から湊は学校に来た。

帰り道、事故な話もそこそこに依頼の話をし始めた。

「次の土曜日の昼、会いに行くよ。」いきなりすぎる。

「せめて同僚の意思ぐらい汲んでほしい。」当然の不満をこぼすが善は急げと聞く耳を持たない。

「どうせ用事はないでしょうに。」

ないからどうこうという話ではない。病み上がりなんだから少しはしおらしくなったらどうだ。

「そういえば、記憶を失ったかもしれないんだけど。」

「そういうことは医者に言うことじゃないの。」

「だってもし検査で入院することになったら《再会屋》の仕事が滞るじゃない。」

「慈善事業なんだから気にすることないだろ。」

「《再会屋》なんて楽しいことをお預けってのはいただけないよ。それで、記憶の話団だけど。義弘と遊んだ記憶や親の記憶はあるんだけど、ところどころ穴あきなんだよね。」

でも生活に支障はないからいいかなって思ったけど、もしかすると重傷なのかもねとおどけて笑った。

「……落ち着いたらもう一度病院に行こうか。」

それから僕たちは昔話をした。一緒にどこで遊んだのか、公園で何を話したのか、小学校や中学校の話をしてどんな記憶がないのか確かめた。僕が関わっている記憶は完全に話が一致した。そんな過去の記憶なんて一致することないよねと笑っていた。

「もしかして私たち仲がいいのかな。」湊が言った。

待ち合わせ場所は駅前の喫茶店だった。こんなことを繰り返すうちに常連になって、マスターに「いつもの」と言ってしまえるのではないかと考える。そうしているうちに依頼人の大沢さん夫妻が来て席に座る。今回は前回と違い、どのような依頼かをあらかじめ聞いておいたらしい。準備がいいなと思った。行き当たりばったりの僕とは決定的に異なる。

今回の依頼は大雑把にいうとこのようになる。下校中に交通事故に遭ってしまった娘に会ってさよならを言いたいという依頼だ。込み入った話は大沢さん夫妻の自宅でということになった。

「いつも『お母さん』、『お母さん』と呼んでくれる優しい娘でした。」

二人の娘さんは何年にも及ぶ不妊治療の末に授かった命らしい。それなのに、まだ小学生になって間もないうちにいなくなってしまいどうにもやるせないとのことだ。いなくなった日の朝は雨が降っていて、憂鬱な気分だった。母の大沢久恵さんは自転車で通勤しているため雨の日はいつもより早めに出なければならない。だけどいつまで経っても身支度を終わらせない子を見てつい怒鳴ってしまった。いってきますも言わずに、泣きながら登校する娘をみて心が痛みながら帰ってきたら謝ろうと思っていた。だが、その子が帰ることはなかった。だからせめて謝りたいと思い依頼したのが顛末だ。

もしかしたらよくある話なのかもしれないけど、悲しみというのは皆平等に訪れる。似たようなことが多くあるからと言って悲しさが薄まることはない。それ。目の前に唇をかみしめ並ならぬ悲壮感を漂わせながら語る親を見ていたら、よくある話だなんて一蹴する気にはならない。

その子のアルバムや思い出などをひとしきり聞いて、引き受けることにした。

その子をイメージする。両親から聞いた話やアルバムを使い想像を研ぎ澄ませる。

がちゃりと玄関の扉が開く音がする。両親が駆け寄り、泣きながら抱きしめる。

「ママ、ただいま。」と無邪気に言う。この子はどれだけ愛されていたのだろう。それなのに、そんな子を奪ってしまうなんてやはり神はいない。しばらく経ち魔法の効果が切れる。納得のいくさよならはできたのだろうか。

大沢さん夫妻が戻ってくる。

「本当にありがとう。お礼をしなくちゃね。」久恵さんは涙ぐみながらそう言い、棚から分厚い封筒を取り出す。

「これはあの子のために、あの子が大人になったときに渡そうと思い貯金していたものなの。だけど、だけどもう私たちには必要ないものだから。お礼としてあげるわ。あなたたちがいなかったらずっと後悔を背負うことになったと思うから。《再会》させてくれたお礼としては少ないかもしれないけど……。」

「……申し訳ありませんがこれは受け取れません。」あまりにも悲しすぎる。

「でも私たちに使い道はないのよ。旅立ってしまったから。」そういって強引に、僕の手に握らせてくる。抵抗したがあまりむげにできずに握ってしまった。

「ありがとう。一時の《再会》だったけど楽しかった。」そう言い目から一粒の涙が流れる。

「お役に立ててよかったです。僕たちはこれで帰ります。」一刻も早く逃げ出したかった。

手に握られた封筒が、やけに重い金属の塊のように感じられた。

足早に逃げ出した帰路で鉛のような口を開く。

「彼らは前に進めるのかな。」

「歩けるよ、きっと。」湊が答える。きっと根拠はないのだ。湊は信念に基づいた行動の結果だからといって、決して迷わないのだろう。僕は迷ってばかりだ。

数日後、激しい雨で目を覚ました。陰鬱な気分になりながら、リビングで朝のニュースを見ていると大沢さん夫妻が亡くなったとのニュースが流れた。警察は一家心中として捜査を進めているらしい。

僕が登校すると教室にはすでに湊がいた。僕は声をかけず席に着く。湊が僕を追う視線を感じたが無視をした。湊もそれ以上は声をかけてこなかったので大沢さん夫妻のことは知っているのだろう。僕は寝るふりをすることにした。

放課後になり湊に声をかけようか迷っていると向こうから声がかかった。

隣を歩く湊は口を開こうとしない。仕方なく僕が先陣をきる。

「ニュースを見たんでしょ。」投げやりに言う。

「見たよ。」

「後悔を晴らした人間が死んでしまった。僕は彼らを殺した張本人だから、君を責めるつもりはまったくない。だけど《再会屋》なんてやめるべきなんじゃないかな。」

本当は、共犯だと思っている。当然主犯は湊。こんなことなら手を貸したくなかった。

「彼らは……。」湊が話し始めるまで待つ。

「彼らはいずれ心中するはずだったよ。早いか遅いかの違いにすぎない。」

ため息をつく、舌打ちもする。だけどそれらは心の中だけにとどまった。

「僕らが協力しなかったら大沢さんは死ななかったかもしれない。」

「でも希望を失って早々に自死を選ぶ可能性だってあった。」

傘を少し傾け僕の目を見ながら言い放つ。

「彼らは後悔を晴らして幸せだったよ。未練がなくなったから自死を選んだ。私たちが殺したなんて思うのは傲慢だよ。もし気になるなら大沢さんに聞いてみたら、君の魔法でさ。」

何も言い返せなかった。別に言い返す言葉が思い浮かばなかったわけじゃない。ただ信条でもって主張するものだから、僕の言葉では格が違いすぎて恥ずかしかった。僕はただ恐怖におびえていて、その場しのぎの言葉を言うのはあまりにも情けないと思ったのだ。そんな心情を察してか湊は小さく、ごめん、いいすぎたと謝った。

「いや、気にしてないよ。」

雨が僕を責めている。そんな批判を振り払って湊に尋ねる。

「まだ、《再会屋》を続けるつもりなのかな。」

「当然続ける。」

当たり前でしょ、とでも言いたげだ。そんな湊に少しでも救われたのかもしれない。かなわないなと思った。

それから僕らは何度か《再会》を繰り返した。《再会》を望む人たちの話を聞くのはつらかったが報われたのだと信じていた。しばらく経った後、すべて暴かれることになる。

周囲の起伏に合わせ湖を取り囲む遊歩道を僕らは静かに歩いていた。朝学校に登校する前に二人で少し寄り道をした。伝えなければならないと思った。そんな僕の心情を察してか、それともただ沈黙を味わいたかったのかわからないけど何も話さなかった。

朝の湖はとても静かで生き物の気配を感じない、この世界には僕らしかいないのではないか。ここは周囲が丘に囲まれていて朝は少し薄暗く、今の時期には少し肌寒い。これから冬になるに従いどんどん寒くなるだろう。

道の先に遊歩道から、半円がせり出したような展望台にたどり着く。湖を一望できるこの場所になんだか来たかったのだ。今日は水面がとても静かだ。身じろぎ一つせず静かに横たわる鏡面を見るとなんだか果てしない畏怖を覚える。ふと石でも投げて鏡を壊してしまいたくなる、すこし罰当たりかもしれない。

隣に立つ少女のほうを向き深呼吸をして心を落ち着ける、がそう簡単に落ち着くものではない。あきらめて、そしてとある告白をする。

「君は一回死んでるんだよ。」こんなに緊張する告白があるだろうか。

「……まあそうなるよね。」薄々気づいてたと湊は続けた。

「君は事故の時すでに死んでいたから僕の魔法を使って《再会》を行った。君は言うなれば『再会者』だ。」

だから君はもとの君とは違うかもしれないと付け加える。

「よく言えた。とても勇気のある行動だと思う。」

「なんのまねだよ。」

笑いながら言ったつもりだったが上手く笑えなかったようだ。

「ひどい顔。」なんで笑えるんだよ、笑える状況かよ。

「でも義弘。違うよね。」

湊は続ける。

「私は私なの。」時が止まった。いや、止まったのは僕の時間だけだ。指一つすらまともに動かせない。呼吸するのさえとても苦しい。

「逃げないで教えてよ。」湊が催促した。

「じゃあ私の考えを伝えるね。」そう言ってベンチに座る。義弘も座りなよって促す。仕方なく隣に座る。

「最初はまったく気がつかなかった。君は心をこの世に戻す魔法って私に説明したよね。それはまったく疑ってなかった。だけど、あの女の子のことを覚えてる。」僕を向いてそう聞く。

「うん、覚えてる。」たどたどしく僕は答える。

「あの女の子のお母さん、久恵さんは、『お母さん』と呼んでくれると言ってくれたね。だけど君が《再会》させた女の子は『ママ』って言ってた。はじめは不思議だなって思ったよだけどそれ以外にも不思議なことはたくさんあった。たとえば退院したとき記憶を確かめ合ったよね。こどものころの記憶なんてさ、ひどく曖昧でまったく覚えていることが違うなんてことは珍しくない。だけどあまりにも一致しすぎていた。それに君は静かにずっと本を読んでいる人間でもないよ。私たちは外でもよく遊んで怪我もたくさんしたよね。だけど私には傷跡が一つもなかった。痛い思いをした怪我だってあったよ。だけど傷跡がないんだ。」

湊はまだあるよ、と続ける。

「決定的なのは事故だよ。あの速度の速さで突っ込まれたら人なんてすぐ死んじゃうよね。だけど不思議なことに頭を数針縫っただけだった。運がよかったと、その時はそう思ったよ。だけど車に跳ねられたのに車が怖くない、少しは怖いけどトラウマになったというほどでもない。まあとにかく私の怪我は奇妙なほど軽かった。」だから思ったんだよ、湊は言う。

「本当に運がよかっただけかもしれない。それにその魔法なら君が怪我をした理由を説明できない。現に《再会》をした人たちは怪我をしていなかった。」

「そうだね。たまたまかもしれない。だけど私は一つの想像にたどり着いたよ。」

やめてくれ、目を背けたものから追われる感覚が押し寄せる。

「私の記憶は誰の記憶なの。」

気持ち悪い。逃げ出したい。

「気づいたんだよ、君の魔法は心を戻す魔法ではないよね。」君の魔法は、と一呼吸置く。

「想像を現実にするようなものだよね。」どう当たってる、実は名探偵なんだとおどけて笑う。

やられた。

「君の魔法は心を戻すものだと私に言ったよね。だけどその魔法を私に使ってしまったら嘘がばれると思った。だから私を無傷で戻すわけにはいかなかったんだ。」もっと詳しく話すねと言う。

「想像できないことは現実にするのは難しいよ。だから君は記憶の再現ができないんだ。私の記憶を再現することができなかった。だって君は私ではないから完全な再現は当然できない。だから事故で頭を打って記憶を失ったようにみせかけることを思いついた。そうすれば少なくとも整合性は保たれる。」結構強引な方法だよね、よくこれで通ったなと笑いながら言う。僕はまったく笑える気分ではない。

「これで君との記憶が完全に一致した理由を説明できたかな。私の存在をどうやって維持してるのかは君が頑張っているからでいいのかな。」

当たっている。

「そうだよ。君は僕が魔法で生み出した存在だ。」

僕は何も話していないのに心が軽くなった気がした。

「君はあのとき事故に遭って、僕でもわかるぐらい即死だとわかった。だから必死に考えたよ。君を再現するのはあまりにも難しかった。だから頭を打って記憶を失ったように見せかけた。だから……。」僕は言いよどみながらこう伝える。

「君の記憶は僕の記憶だ。そして君について知っていることをすべて想像して君を再現した。」僕は続ける。

「君があのとき、あまりにもつらそうだから嘘をついたんだ。それを打ち明けられずに今にいたる。墓場までこの秘密を持って行くのかと、後悔してたよ。」でも杞憂だったと、笑った。今度はうまく笑えただろうか。

「本当にそうだったんだ。納得した。きっと君の左腕の傷も君の魔法に関するものだよね。私を忘れないようにするものなのかな。」

そうだよ、だから必死に考えた。どうすれば忘れないか。だから自分自身に消えない傷をつけて君を忘れないようにした。

「ところで義弘は私のしらを切るぐらいできたでしょ。なんでしなかったの。」

「それは不誠実だと思ったんだ。向き合うべきだと思った。僕のわがままで生み出した湊がそう聞くのなら答えるしかないだろ。」言葉が止めどなくあふれる。

「ルール違反だとはわかってたけど、さよならを言わずに大事な人が死んでしまうのはいやだと思ったんだ。だから君を作った。だけど罪悪感は消えなくて。だってそうだろ。君はいわば被害者だ。僕の勝手な思いで作られた被害者なんだ。なんで被害者に楽にしてもらってるのかな、情けない。」自己嫌悪だ。

「君は逃げ出してばっかりだ、ずっとそうだった。私の死からも逃げ出して、後悔しないように生きろとか人間の美しさを説くくせに君は結局普通の人だったんだ。」

耳が痛い。

「そしてもし私が気がつかなかったらずっと苦しむ予定だった。」

「そうなるね、でもそれがせめてもの贖罪だと思ったんだ。」

「じゃあ一つ質問、私の意識は本物なのかな。」

「完全に本物とはいえない。今の湊は僕が見続けていた湊だ。君がずっと何を考えていたかは完全にわからないから僕がそうぞうして作った湊の意識だ。」

意識というか行動理念というか。少なくとも湊が湊であるようにしたつもりだ。

「そうか。本物かはわからないか。」別に落ち込んだ様子もなく答える。

「まあ本物か偽物かなんて大差はないよ。どう思うかだよ。」

僕を慰めてくれているのか。

「だからさ、君に言いたかったんだ。」

湊がこっちを振り返り僕の目を見つめる。僕はひどい顔をしていないだろうか。

「君が好きなんだよ、義弘。」

「……今言うセリフ、それ。」間抜けな声が出た。

「それこそ今いうセリフ。普通もっと気の利いたことを言うよね。」

「私が本物かどうかなんてどうでもいい。だから私は自分の感情を信じるよ。やっぱり私は君が好きだよ。」よく澄ました顔でいえるな。

「その感情は僕が想像したものかもしれない。」

なんて卑屈なんだ、僕は。自分が自分でいやになる。

次の瞬間湊は立ち上がり両手で僕の胸ぐらをつかむ。強引に僕を立ち上がらせようとする。そして中腰になった僕の唇に熱いものが触れた。頭が真っ白になる。手を離されてそのままベンチに落ちる。

「私の気持ちが偽物だからいやなの。」悲痛な、胸が張り裂けそうな叫びが聞こえる。

「ごめん。」そうとしかいえなかった。

「本物とか偽物とかどうでもいい。だから私は君に言いたいよ。偽物だって本物以上に愛情を注げるならそれは本物となり得るでしょ。」湊が言った。

もう逃げるわけにはいかないな。僕は僕と向き合うときが、ツケが回ってきたと言うとなんだか聞こえが悪いけど。でもそういうことだ。自分に、何より湊に。エゴで巻き込んだ罪に向き合わなければ。

「湊。申し訳ないけどまだ結論は出せない。」

「……それ本気で言ってるの。」大きなおおきなため息が聞こえた。

「湊のことは大切に思っているけど、まだ気持ちが整理できない。」

「義弘、君は本当に変わらないね。」

怒らせてしまったかもしれない。

「君のことは大切に思ってるから、きっと前向きな結論を出せると思う。」嘘はついてない。

「じゃあ、結論が出るまで待つよ。君の話では私を忘れてしまうと私はいなくなるのでしょ。なら私を忘れないようにずっと考え続けてもいいよ。それと同時に確かなたしかな思い出を作ろう。」

だって私たち一蓮托生でしょ、と明るく言う。

「でもやっぱり結論は早めに出してほしいな、ちょっと気になるから。」

かなわないな、やっぱり。

初稿後書き

後回しにして目を背けたものが牙をむくというか、後々面倒なことになって帰ってくる経験をしたことがある人は多いでしょう。私も当然あります。今でもそれにずっと苦しめられています。それから逃げ切るために面倒なものにさいなまれる話を書きたかったのです。

謎コメント

最後のくだりいらなくねえか。大衆小説を意識した結果よくわからんくなった。湊を殺すべきだった。ていうか死人がなんていうかなんてわかんねえよ。だって死人に口なしだろ。